

### 学生ら10人が参加

この「緑の国際ボランティア研修」は「緑の募金」を活用して緑化活動を助成している公益社団法人・国土緑化推進機構が「友好の森づくり」事業の一環として主催した。タイ、カンボジアなどで環境保全型農業の普及活動を展開しているNPO法人・環境修復保全機構（東京都町田市）が共催。学生ら10人が参加し、8月15日から8日間実施した。

「友好の森づくり」は国土緑化推進機構による国際森林年の記念事業。カンボジア研修のほか、9月にはベトナムでマングループを植樹する環境ツアー、ラオスでも植樹ツアーを実施した。



首都フノンペンから南約80キロのタケオ州フオーサイ地区。苗木を運ぶ元農業指導員のウアイと意欲的だ。

「サボンヌさん(7)は二帯は豊かだった。動物もいなくなると嘆いたが、「森がよみがえれば、動物も戻ってくる」と期待した。

■消えた野生動物  
さび色の砂地が広がる貯水池の一角、地元若者に日本の研修生も加わり、歓声をあげながら苗木を植えた。

# 豊かな森よみがえれ



日本人研修生（左）と一緒に苗木を植える地元住民＝タケオ州の植樹会場で

## 伐採深刻化するカンボジアで希望の植樹

■村で再生の試み  
この後、メコン川流域のコンボンチャム州に移動。NPO法人・環境修復保全機構が推肥づくりなど環境保全型農業を指導するワチャ村に入った。道路沿いには、1〜2メートルの長さの丸太が積まれた。自然資源調査を実施しているほか、植樹用の苗木の生産に向け苗木づくりの準備が進め、森林再生の試みが始まっている。

「煮炊きに木の枝を運ぶ母親や子供の姿が印象的だった」と話す東京農大2年 中屋智博さん(20)は研修を終え、「我々の生活に森林が密接に関係していることを深く考えなかった。改めて、森林の重要性を考えさせられた」と話した。

■違法伐採後絶たす  
カンボジアの現代政治を研究し、研修で解脫役を務めた東京大大学院総合文化研究科の研究員、山田裕史さん(33)によると、ポル・ポト政権の崩壊(79年後も続いた内戦が終結したのは90年代末)政治的安定によって、この約10年で経済が飛躍的に進展する一方、地方にもコピーやゴムなどの外部資本によるプランテーション(大規模農園)が増え、森が消えた。都市と農村の所得格差が広がり、貧困にあえぐ農家は森林を開墾して水田や農地を整備した。燃料のまきを確保する目的で、木が切られている。日本外務省の資料によ

ると、69年に73%だったカンボジアの森林率は、97年には58%に減少。また違法伐採も後を絶たず、一行が立ち寄ったJICAカンボジア事務所は、小林雪治次長によると、ベトナム国境に近い東北部を中心に違法伐採が確認され、「政府は人手不足で取り締まりが行き届かない」と説明した。



高床式住居が並ぶ集落で、研修生は子供たちと交流した  
|| コンボンチャム州ワチャ村で